夢通信

第１８号（2021/3/11）
住民流福祉総合研究所（木原孝久）
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476－1
http://juminryu.web.fc2.com/

認知症を隠してはいけないか？

「カミングアウト」の功と罪を見直してみる

1.「気になる人」と、対象を曖昧にすれば、話は進む

■マップ作りで「認知症の人は？」と聞いたときの反応

支え合いマップ作りは、気になる人を探して、その人に誰が関わっているのかも調べ、対応策をみんなで考えるのだが、大抵の場合「認知症の人は？」と聞く場面が訪れる。

そのとき現場では、様々な反応が出てくる。その問いが出されると、現場が凍り付いたように沈黙が支配する。一呼吸おいて「認知症はいないよ」と誰かが言う。そんなはずはないだろとみんな、思っているが、それも暗黙の了解という雰囲気だ。

「知っているけど、言わない」と正直に言う人もいる。「絶対言うなと、夫から言われてきた」と内情まで打ち明ける。その中間の、指をマップのあちこち動かして考える様子を見せながら、しかしその指が止まることはないという人もいる。そうやって、誰も言わないので、言いたそうな人も発言する機会を失ってしまう。

■「この人、気になるんだよね」の「気になる人」とは？

その「言いたそうにしていた」人を注視していると、隣の人にひそひそ話を始める。「この人、気になるんだよね」「この人も…」と。その「気になる人」が認知症であることの代名詞であることは、みんなもすぐに分かった。

そこで私もこんなことを思いついた。「今日は、認知症とはっきりとはわからないけど、なんとなくそうかもしれないという人を『気になる人』と言って、探してみましょうよ」と提案したのである。それならいいということで、その後は「気になる人」がどんどん出てきた。対象を曖昧にすることで、話は前へ進んでいくのだ。

2.「ちょっと変わった人」で地域に受け入れられていた

■「かなり変わっている人」も同様の扱い

私が若い頃、地域には「ちょっと変わった人」があちこちにいた。皆はその人のことをそう言い合っていた。しかし、だから施設に入れちゃいましょうとは言わない。本人も、すまして地域の井戸端会議やサロン、グループにも入って来るし、グループも排除しない。「ちょっと変わっている」と言われる人の中には、「かなり変わっている人」もいる。今なら明らかに知的障害者とされるであろうという人も。それでも、彼らも含めて「ちょっと変わった人」の部類に入れてしまうのだ。

今では、その人たちにきちんとした名称が付けられる。自閉症者、知的障害児、認知症など。そうやって命名された子どもは、地域から排除され、一般の学校からも排除され、ひとりでバスに揺られて特別な学校に行く。そこを卒業したら、作業所へ。一定の年齢になると、そこも卒業し、あとは一生、家の中で暮らすことになる。

3.一人ひとりを命名し、定位置に据えることで安心する

■素性のわからない人が地域にいると「気になる」

これが文明というものなのだ。１人ひとりをいくつかの種類に分けて、命名する。この人は知的障害児、この人は認知症。私たちはこうやって、1 人ひとりを命名することで安心する。ちょっと変わった人が地域にいると「気になる」のだ。そういう人を探し出して、命名することで安心する。安心ついでに、社会のふさわしい場に入ってもらう―福祉施設とか。これでもっと安心する。社会にはこれ以外、「ちょっと変な人」はいないとわかると、すっきりするのだ。

「カミングアウト」という言葉が流行っている。障害などを隠さずに、ちゃんと公言しましょうということだ。そういう人たちがグループを作って、「ほかの人たちも勇気を奮ってカミングアウトしましょう」と。これも大事なことであるのは間違いない。

だが、今述べてきたように、よくわからない人として、周りの人たちに不審に思われながらも、本人は気にせずに、社会のあちこちに顔を出し、普通の人と同じ充実した生活を送っている人もいるのだ。

■制度で位置付けられると、それで人生行路は決まってしまう

マップ作りで認知症の人が出てきたとする。この人にどうしてあげるべきかとなったとき、介護保険に詳しい人は、「この人の要介護度はいくつなんだ？」と質問してくる。それがわからなければ対策の立てようがないというのである。

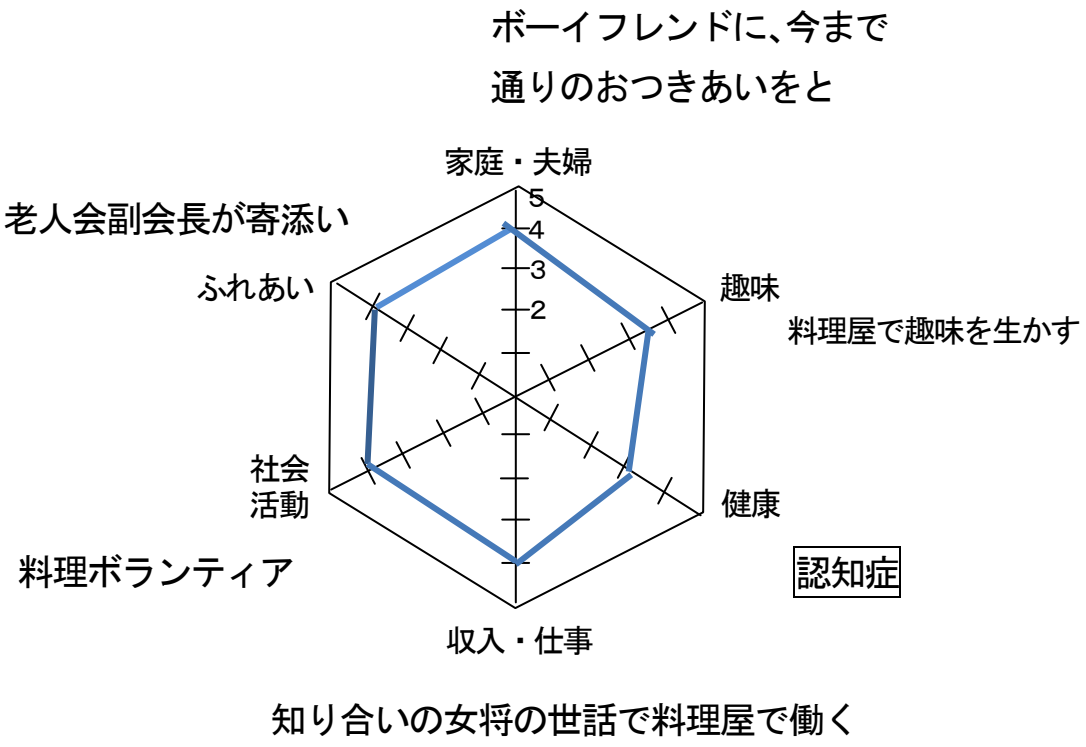
例えば要介護度が４とわかると、あとは制度の指し示す通りに動くことになる。老人ホームへの入所が第一候補になるだろう。それが決まれば、本人の生活はこれで決まってしまう。要介護度が１とか２の場合なら、デイサービス主体の対応となる。週に何日かデイへ行って、そのあとの日は、自宅でぶらぶらという人が多い。地域グループはデイの利用者をあまり歓迎しない。要介護者は別の世界にいてほしいと思っている。これも文明の法則通りだ。

しかし本人はこれで納得できているだろうか。宮崎県で、毎週施設を抜け出して、地域で開かれるふれあいサロンに自主参加している認知症の女性がいた。こういう人は特殊であって、大抵は制度が決めた生き方のとおりに生きていくより仕方がない。

4.普段通りの生活を続ければ、豊かさも満開のまま

■「母が認知症になっても、今まで通りの生活をさせよう」

北海道で見つけた話であるが、認知症になった母親（ひとり親）にこれからどういう生き方をしてもらいたいのかを姉弟で話し合った。その結果、今まで通りの生活をしてもらおうということになった。今まで通りの生活とは、特定の福祉制度に任せるのでなく、今までと同じような地域生活をということである。カミングアウトしないということだ。

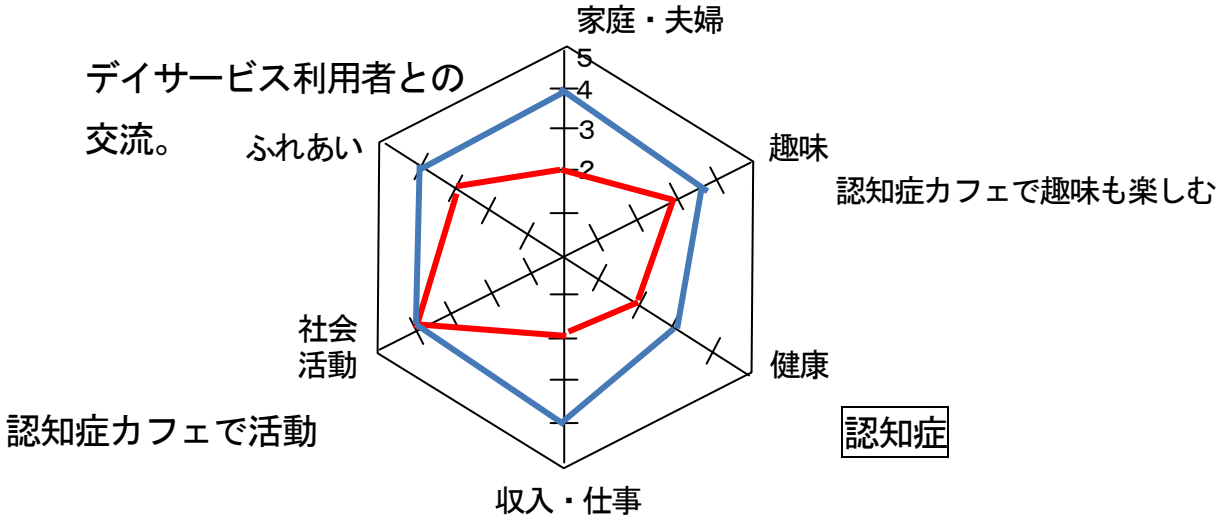


彼女の生き方を説明するのに、豊かさのダイヤグラムを使うことにする。人間は豊かに生きたい

と思ったとき、考えるのは以下の６つのポイントだ。①仕事・収入、②健康、③趣味、④家族・夫婦、⑤ふれあい、⑥社会活動。これらを６角形に載せて、その１つ１つを５段階で評価し、その点を結べば、これが本人の豊かさ状況となる。

姉弟の考え出した策は、①仕事は、今まで調理の仕事をしてきたこと生かして、知り合いの料理屋の女将の店で働かせてもらい、時々お金ももらう。③趣味は、長年仕事にしてきた調理が彼女のライフワークのようだ。④夫婦は、ボーイフレンドに、今まで通りのおつきあいをしてもらうことになった。⑤のふれあいは、知り合いの老人クラブの副会長が、「認知症ということは私だけが知っていればいいよ」と言ってくれて、この人が寄り添う形で老人クラブに参加。⑥は社会活動だが、料理の腕を生かして、宅老所の食事作りなどのボランティア活動を始めた。デイサービスにも行っているが、これも「他の人のお世話をするボランティア」という形にしてもらっている。

彼女の豊かさ度はどんなものか。姉弟が「今まで通りの生活を」というのだから、その通りに、以前とあまり変わらないのではないか。認知症ということを公言していないから、彼女と接する人たちは、薄々は気が付いているだろうが、だからと騒ぎ立てることはしないだろう。というわけで、以前と変わらず、かなり充足されていると見ていい。下のダイヤグラムの青色の線だ。



5.カミングアウトすれば、治療・リハビリ中心の生活に

■誰もが門戸を閉めてしまうかも…

では、もし彼女がカミングアウトすれば、どうなるだろうか。老人クラブは、認知症の人は受け入れないのが現状なので、彼女だけ例外というわけにはいかなくなり、やめざるを得なくなるだろう。今は副会長だけが知っていることになっていて、この人がサポートしてくれているのだ。

デイサービスも、今は「他の人のお世話をするボランティア」ということにしてもらっているが、ここでも認知症だとカミングアウトすれば、サービスを受ける一方の利用者になってしまう。

■認知症を公言した場合に歩む通常ルートを辿ると…

認知症を公言した場合に歩む通常ルートを彼女も辿ることになれば、彼女の生活の中心はデイサービスになる。ここに週に２回か３回通う。残りの日にサロンなどに顔を出す人もいるが、今のサロンは認知症などの要援護者が参加するのを嫌う。そうなると、あとの日はどうなるか。体験者に聞くと、最も多いのが「食っちゃ寝、食っちゃ寝」というものだ。良くも悪くも、デイサービスは利用者に楽しんでもらおうといろいろサービスをする。すると、利用しない日に今度は自分で工夫して、楽しく過ごそうという気がなくなるのだ。

これだけでは寂しいという人は、認知症カフェに誘われるかもしれない。ここなら歓迎してくれる。そこでボランティアができるかもしれない。ふれあいも豊かになる。趣味が身につくかもしれない。カミングアウトしたなりの豊かさが確保できるかもしれないが、やはりそれは、それまでの彼女らしい生き方や豊かさとは異なる。

■生活の豊かさ実現は後回し

カミングアウトしない場合と、した場合の、豊かさ度を測ってみた。むろん私の主観も入っているが、これだけの違いが出た。なぜそうなるのか。カミングアウトした場合、認知症であることをはっきりさせたうえで、治療やリハビリに重点を置いた、「認知症の人」としての生活になるからだ。認知症になったのだから、デイサービス利用などが中心になり、豊かさの維持といったことは、犠牲になっても仕方がないということだ。これが文明的な対応である。

この文明的な対応には、抜けている視点がある。デイサービスなどによる対応よりも、むしろボーイフレンドとおつき合いし、料理屋で働き、料理ボランティアもして、老人クラブ活動に参加したりする方が、よほど治療やリハビリの効果が期待できるとは言えないか。カミングアウトしない場合の彼女の生き方を、再度見直してみると、「今まで通りの生活」を続けること自体が、もう１つのデイサービスと考えられるのだ。こちらは文化的なデイサービス、ライフスタイル型のデイサービスなのである。普通の生活をすることで、それがそのままデイサービスの機能を果たしてしまう。

6.認知症や障害があると能力がガクンと落ちる？

■現役を続けたい人は、ひたすら認知症であることを隠す

今の私たちの社会では、認知症など何らかの障害を持っていることがわかると、周りの人は、そ

の人は「普通の人」ではなくなり、能力もガタンと落ちると見てしまう。だから、職場で現役を続けたいという人は、ひたすら認知症であることを隠すのだ。

マップ作りでよく出てくる話だが、誰かが認知症とわかると、今までやっていたグランドゴルフもやめざるを得なくなる。ならば、認知症でもできるように、いろいろ工夫をしたらどうかと私は提案する。スティックを改造するとか、ルールを変えるとか。ところが周りの人は、全く受け付けない。「だって、この人は認知症なんだよ」と言い張るのだ。認知症になったら、もう何もできなくなるといった感じなのである。この強烈な偏見をなんとかしないと、とてもカミングアウトだなどとは言えないのだ。

岐阜県中津川市には立派なマレットゴルフのコースができている。人間とは不思議なもので、これだけ立派なコースがあれば、障害があっても、腰が少々痛くても、「これもリハビリだ」などと言って、出かけてしまう。こうして地元の人は、こぞってコースに出かけている。ときどきマレットゴルフの競技会が開かれるが、そこで認知症の人が２人も優勝してしまった。地域の人が、「俺も、彼らに教わるか」と真剣に言っていた。こういう事実を見せられると、認知症の人の能力について、ほかの地域とは別の見方が生まれるようなのだ。

■障害を持っていても能力が高い人もいることを示せ

だから、カミングアウトを推奨するのなら、並行して、中津川で優勝した認知症の人のような人をどんどん社会に送り出す必要がある。何もそんなに、能力を誇示することはないではないかという人もいるかもしれないが、それは違う。認知症に対してどのような見方を広げるか、まさにイメージの闘いと見るべきではないか。

ＮＨＫテレビで発達障害の問題を取り上げた時、スタジオに登場した当事者の人とは、東大生だったり、大学院の研究科にいる人だったりする。テレビを見ている人は、「へえー、発達障害だって東大に入る人もいるんだ」と思うと同時に、発達障害に対する見方を変えていくのだ。

7.認知症が社会に潜っていて困る人がいるのか？

■認知症という人間がいる、と思いたい

文明とは怖いものである。いったん認知症と表現されると、その人の全身、すべてに認知症の色を付けられてしまう。この人は「認知症という人間」。周りから見たら、この方がシンプルであるし、わかりやすいからだ。

その人には、サロンは認知症カフェに行きなさい。社会活動は、そこへ行けば認知症でもボランティアができます。それらは施設に入っていてもできますよ。趣味もカフェで生かせますよ。こう

アドバイスすればいい。まことにシンプルで、わかりやすい。

私の友人が、子どもが知的障害だと知人に打ち明けた。と言っても、障害児というほどの障害ではないと伝えていたのに、その知人が家に来てその子を見た瞬間、びっくりしてしまった。「なんだ、普通の顔をしているじゃないですか！」

これには彼女、がっくり来てしまった。その知人は、障害児は障害児らしい顔や様子をしているはずだと思っていたのだろう。その方がわかりやすいと。それ以降、彼女は息子のことを他人に軽々しく言うまいと心に決めたという。

■いかにも普通の人のような姿をしていては、いけないか？

私たちは「福祉」という営みを、一般社会から抜き出し、関係する人を担い手と受け手に分け、さらに受け手を障害や要介護別に分けて、それぞれに一律のサービスを提供する。文明はこんなシンプルで、わかり易く、やり易い方法を好む。

ところがその対象者が、普通の人たちの中に混じっていると、区分けしにくい。いかにも普通の人のような姿をしているのは、わかりにくくて困る。どの人が要援護者なのか、わかりにくいではないかと。

試しに先ほどの認知症の女性をイメージしてみていただきたい。彼女の娘や息子は、これまで通りの母らしい生活をそのまま続けさせたいと考え、それを実現した。そういう彼女を見て、周りの人はどの程度、彼女を「認知症の人」と見るだろうか。「ちょっと気になる」程度ではなかろうか。

8.「私は認知症」とカミングアウトする利点とは何か？

■人間を単純に操作したい人が、人を区分けしたがる

福祉が社会の中に潜っているのと同じように、対象者も社会の中に潜り込んで、他の人と明確には区分けが付かない。皆、普通の人の顔をして、普通の生活をしている。見分けがつくようにはっきりさせることを望んでいる人は、じつは存在しないのだ。

だいたい、社会を見ると、この人は障害者、この人は認知症、この人は精神障害者、この人は生活困難者、この人は東大を出たエリートなどと、きれいに区分けができる社会こそ、却って恐ろしい。そうなると、「私は認知症です」とカミングアウトすることの利点とは何なのか。

わかり易さを求めている人は、それによって相手への関わりを簡素化したいと思っている。認知症で要介護４なら施設に入れよう、要介護１か２ならデイサービスを利用させようというわけだ。人間を単純に操作したい人が、こういうことを考えるのだ。

■「摘発を免れた」しあわせを今、噛みしめている

ある障害者の男性の話だが、幸か不幸か、いや、彼にとっては幸いだったのだが、どこかの場面で区分けされたり、分別されたりする機会がなかった。普通なら、施設に入れられても当然だったのだが、それを免れた。そのため、一般社会の中でその年になるまで(潜って)生き続けることができた。摘発を免れた、といった感じである。「その幸せを、今つくづく噛みしめている」と言っていたのが印象的だった。

9.2つの対応法が折り合える地点はどこか？

■人を病気のあるなしで差別する社会をなくしていけばいい

こう書いてくると、カミングアウトという行為に問題がありそうにも見える。しかしもちろん、「私は認知症です」と言ってしまった方が、すっきりするというのもまた事実だ。公言したことで、職場を離れざるを得なくなることもあるだろうが、人を病気のあるなしで差別する社会をなくしていけばいいことだろう。認知症とわかるとそういう目で見る人もたくさんいるだろうが、それを勇気をもって乗り越えていけばいい。

認知症をポジティブに捉え、その見方を周りに広げていくのが、本当のあり方で、こういう人たちが広がっていけば、偏見を持つ人もなくなっていくだろう。「私は認知症なので、こういうことに困っています。助けて下さる方は、こうしてください」と、パンフレットなり、インターネットでアピールしている人もいるし、それには周りの人たちも前向きに反応してくれる。

自身、そういうポジティブな見方をし、要介護５だろうと、サロンに積極的に参加していけばいい。嫌がるサロンもあるだろうが、そうでないサロンもあるはずだ。

■認知症になってから結婚した人もいる

たしかに日本文化にはこういう生き方は想定されていない。しかしそんな文化なんぞ気にせずに、文明的な生き方を選びつつ、自己実現を成し遂げている人もたくさんいる。オーストラリアの政府官僚まで勤め上げたクリスティーン・ブライデンさんは、認知症になってから結婚した。認知症になったから仕事はやめなければならないと、ネガティブに捉えれば、きりがなくなる。

文明的な生き方・見方というのも、それがそのまま人に白黒をつけて、その人を狭い生き方に押し込めてしまうのかというと、そうでもないかもしれない。

■２つの生き方が１人ひとりの中でも錯綜している？

今は過渡期にあるのかもしれない。１つは、認知症だということをむやみに公言して、まわりに

波風を立て、結果的に豊かな生活ができなくなるよりも、そのあたりはさらりと受け流し、なるべくこれまで通りの豊かな人生を送っていくという、いわば文化としての対応、生き方。もう１つは、その反対の、文明的な視点に立って、私は認知症であるとカミングアウトし、堂々と必要な助けを求めていき、そして私を要介護度で縛ったり、「認知症にふさわしい生き方」を強制するような圧力とは果敢に闘っていくという生き方。

今は、この２つの生き方が、１人ひとりの心の中で、あるいは人と人の間で、錯綜しているのかもしれない。しかも自分ではなかなか交通整理ができないでいる。いずれは、この２つが折り合える対応法に収斂していくのではないかとは思うが、そう簡単にはいかないという見方もできる。というのは、この闘いの底には、文化という厄介な存在がある。文化は百年は変わらない。その文化との闘いに、だれが勝利することができるのか。

世話焼きさんに頼るほかに手はないか…

●日本人のやさしさ 125 か国中 125 位で、やさしい国を作るには?

1.「日本は最下位」をどう評価するか？

■「あなたはこの１ヶ月で見知らぬ人を助けたか？」

英国の「チャリティーズ・エイド・ファンデーション」（ＣＡＦ）という機関が、2009 年から 2018 年までの１０年間に、125 カ国以上・130 万人以上の人々を対象に、①人助け、②寄付、③ボランティア活動への参加について調査した結果をまとめたが、①の結果が衝撃的だった。

「あなたはこの１ヶ月間に見知らぬ人、または助けが必要な見知らぬ人を助けましたか？」という調査で、日本人は 125 ヶ国中 125 位、つまり最下位だったのである。

■アフリカ諸国がトップ１０に７か国も

報告書には「最も見知らぬ人を助けない国々（ワースト 10）は、現在またはかつての共産主義国が占めている」とあるが、そうした国（中国やスロバキアなど）よりも日本は下だったのだ。

逆にトップ１０を占めるのは、アメリカ（３位）、イラク（８位）、カナダ（９位）、ニュージーランド（マラウィと並んで１０位）を除き、７カ国がアフリカだった。

■「日本人のやさしさって、こんなもんさ」

あちこちでこの事実をぶつけてみたら、二種類の反応があった。一つは、「もっと上の順位だと思

った」、だからこの結果は意外だというもの。もう一つは、かなり冷めた人で、「日本人のやさしさって、こんなものじゃないの」という。どちらかといえば、後者の方が多い。私たち日本人は、元々やさしさが欠けているのではという見方である。

2.「やさしくない日本人」の特殊事情があった

■日本人のやさしさは受け身型だった

日本のある市で「困っている人がいたら、あなたはどうするか？」という調査をしたら、「頼まれたら助ける」という人が大半を占めた。「頼まれなくても助ける」が２３％、「頼まれたら助ける」が７２％。日本人は、積極的に助ける人は少ないのだ。

■日本人のやさしさは、身内へのやさしさ

イギリスでの調査で前述のような結果が出たことについて、一つ思い当たるのは、「見知らぬ人を助けたか？」という質問が、日本人にとっては不利ということだ。日本人のやさしさは、身内へのやさしさなのだから。

「身内」と言っても、いろいろある。文字通りの身内から、「親しくなった人」という意味での身内でもある。いずれにしても、この身内でないと日本人は優しさを発揮できないというハンディがあるのだ。

■日本人のやさしさは、横並びのやさしさ

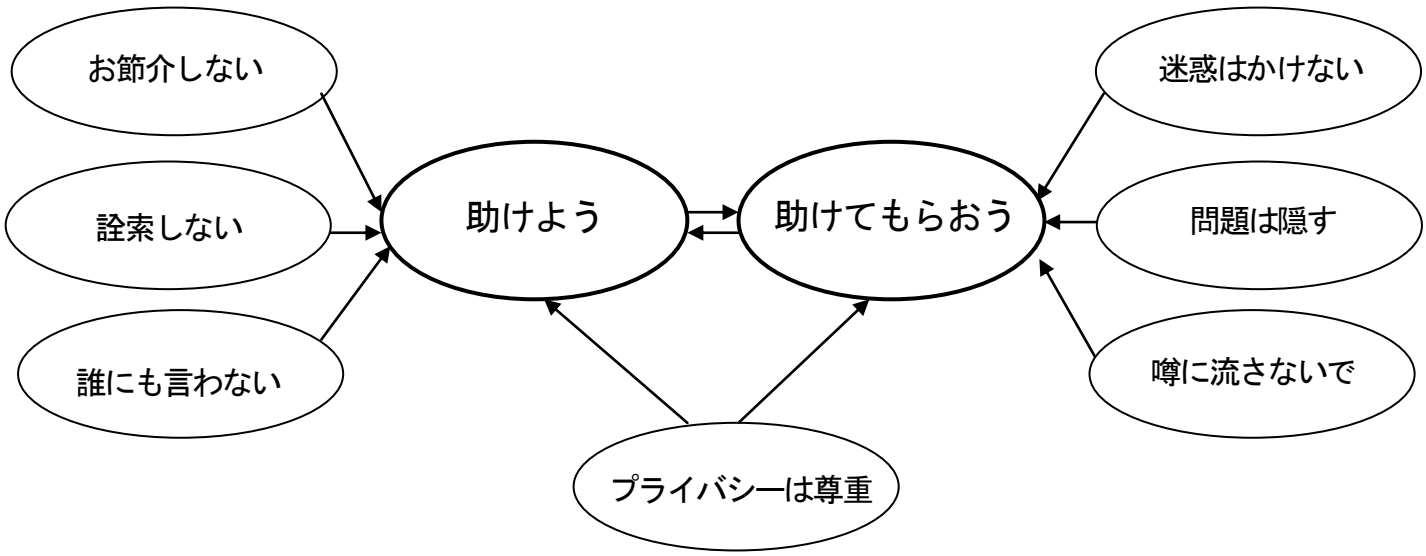
また、日本人のやさしさは、「自分一人でもやるぞ」といったものではない。みんながやさしければ、私もやさしくなるといった、横並びの善意なのだ。だから、周りがみんなやさしくなれば、自分もやさしくなりやすい。

■やさしさを発揮させない日本の風土

ここに紹介したのは、私どもがよく取り上げる「日本人のおつき合いの流儀」をもとに、助け合いができにくい日本の風土を整理したものだ。

助けてもらう側は、自分の問題は隠したい。一方で助ける側は、詮索をしてはいけないと抑制がかかる。その人の事情（困り事）を知らないようにしようというのだ。

また、問題を抱えている人は、そのことを噂話に流してほしくない、つまり周りに言いふらすなという。これで助けようという人が減る。助ける側は、「誰にも言わない」、つまり「私は口が堅い」というのが自慢になる。



さらに、助けられる側の人は迷惑をかけたくないから、助けを求めない。助ける側は「お節介はやめよう」という。

このように、担い手がやさしさを発揮する機会を、自他で抑制しているのが日本人なのだ。

3.日本の文化を生かしたやさしさ強化作戦

■やさしさの評価図で日本のやさしさ文化を評価

やさしさ評価図を作ってみた。①から⑤まである。まずその解説。

①は自主的な善意か受け身の善意かと言うこと。

②は周りを見ながら、やるかどうかを決める人と、自分一人でもやるぞと言う人。

③身内ならやるという人と、見知らぬ人でも助けるという人の違い。

④消極的なやさしさと積極的なやさしさ。消極的とは、積極的に相手を助ける行動にまでは出ないが、それ以前の、やさしく見つめるとか、寛容な精神で対応するというぐらいならするという意味である。

⑤は見返りを求めないで助けるか、双方向の助け合いかの違いだ。

「やさしさ評価図」

①頼まれたら助ける
受け身の善意

当事者が助けられ上手になって、住民に助けを求める

進んで助ける
能動的善意

②皆がやるならやる
社内・グループ内

世話焼きが先導して組織内の活動を牽引

自分一人でも

③身内なら助ける

世話焼きが先導して地域グループ内の助け合いを起こす

知らない人も

④消極的やさしさ
許す・我慢・大目

積極的やさしさ
助ける・

⑤双方向の助け合い
恩返し・借金返し

世話焼きが先導し、当事者がニーズ発信して、ご近所助け合いを起こす

見返りなく助ける

4.日本のやさしさ文化は、世界には通用しない？

日本人のやさしさが、世界では 125 位だったと言うことは、この図でなんとなくわかってくる。イギリスの福祉団体が求めているやさしさは、この図で言えば、限りなく右の方で、それに対して、日本人のやさしさは、限りなく左の方であることがわかる。左の方の善意を世界はたいして評価していないとみるべきなのだ。

どういうことか。①は頼まれたら助ける。②みんながやるならやる。③身内ならやさしくする。④は事実上やさしさ活動とは言いにくい。⑤は双方向の助け合いで、これもやさしさとは異なる。恩返しも、助け合いの一環と見れる。

5.日本の文化をうまく生かすよりほかにない

この図全体を見ていて、このどこから日本人のやさしさを掘り起こしたらいいのか、正直なところ当惑せざるを得ない。やはり日本人は能動的なやさしさ、積極的なやさしさは苦手なようなのだ。この図を隅から隅まで眺めていても、これぞ日本の活路だと言えるヒントを見出すのは難しい。

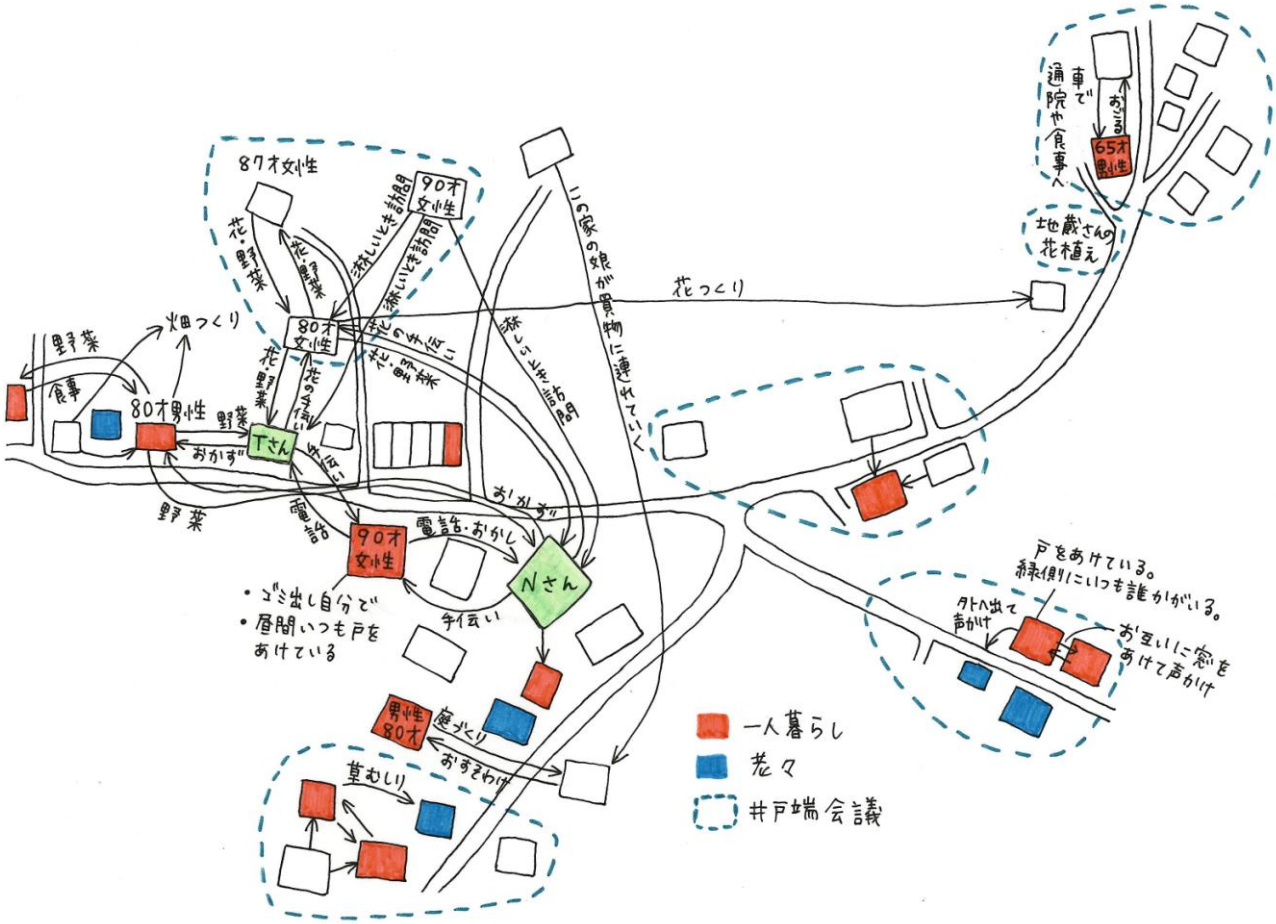
そこで次善の策を考えることにした。その策がうまくいく可能性が見えるのは、その策に世話焼きさんという存在を噛ませるからである。

■頼りは世話焼きさん。彼女に助け合いを牽引してもらう

日本人はやさしくないと言われると、そんなことはないという人もいるのではないか。私は全国各地で支え合いマップ作りをして、住民と膝突き合わせて懇談をしてきた。ある懇談の席では、やっぱり日本人はやさしさが欠けていると思い、またある懇談の席では、やっぱり日本人も捨てたものではないと思う。正反対の感想が出てくる、その理由を辿っていくと、その席にたまたま世話焼きさんがいるどうかだった。

以下の支え合いマップを見ていただきたい。この中に大型世話焼きさんが二人いる（緑色の人）。また特定の一人におすそ分けをしている人、送迎をしている人などが十数名いる。中小の世話焼きさんだ。一つのご近所、およそ 50 世帯だが、その中にこの程度がいる。やさしいというのはこの人たちのことなのだ。

そこで日本の文化で拾える部分を集約し、それを世話焼きさんで先導させるのである。



■受け身の善意を引っ張るために当事者の助けられ上手を利用

頼まれたら助けるというのなら、当事者の出番だ。自助力を発揮して、住民に積極的に「助けて！」攻勢をかけるのだ。これはご近所の助け合いでも生きる。ご近所では当事者は割合積極的に助けを求めている。

■身内なら助けるというのならグループを身内にさせる

地域グループは、住民には身内に近い。そこでの助け合いを起こさせる。その場合にも、世話焼きさんが役立つ。職場でも、身内意識が育つのなら、ここでも世話焼きを生かした身内の助け合いを起こさせていけばいい。

6.ご近所の助け合い・世話焼き・助けられ上手の３点で

結局のところ、これぞという決定打は期待できない。せめてもの知恵として、ご近所での助け合いとそこにいる世話焼きさんのはたらき、それに当事者の自助力、特に助けられ上手の腕を発揮し

てもらうという、この３点を使いこなすより仕方がない。

やはり期待すべきは世話焼きさんである。昔からそのことは言われているにも関わらずこの人を前面に押し出そうとはしない。それを遮る力が働いている。世話焼きさんに、活動に際しての悩みを聞くと、ほとんどの人から同じ回答が返ってくる。「お節介と言われるのが、いちばんこたえる」。世話焼きさんと普通の人とは明らかに違うのだ。この人が生かされなければ、救いはない。